

3項 日本の生協と賀川豊彦

賀川豊彦から何を受け継ぐのか ー開かれた共助とペイ・フォワードの精神ー

伊丹 謙太郎

法政大学 大学院公共政策研究科 教授



1. はじめに

ここでは、戦前・戦後にわたりわが国の生協運動を牽引してきたリーダーのひとりである賀川豊彦について考えます。生協の世界においては、日本生活協同組合連合会の初代会長として知られている人物です。また、戦前から続く数少ない生協のひとつでもあるコープこうべは今年2021年に創立100周年を迎えますが、この100年には、賀川の指導・助言によって設立された神戸購買組合と灘購買組合時代の歴史も含まれています。

さて、今日の生協は、時代を経て組織が大きくなるとともに、設立時の組合員・職員が世代交代し、「当事者性が薄れる」事態に陥っているように見えます。組合員は、「あつて当然」のものとして生協を利用し、組合員との顔の見える関係こそ大切にすべき職員も、数字を追いかける専門職になってしまっている。人びとの日々のコミュニケーションを通じた民主主義に立脚すべき生協が、「消費者の組織化」であることを忘れて単なる「消費の組織化」になってはいしないか？という疑問を感じることがあります。生協が生協であるためには、そこに関わる一人ひとりが運動の当事者であるという強い自覚が必要です。生協運動史を学ぶ意義は、私自身があの時代あの場所に立たされていたらどう行動しただろうと想像しながら運動のルーツと先人の活躍を通して同じ運動に連なる自分を捉え直すことにあります。賀川豊彦はそのなかでも、現在に続く生協運動の流れが形成される上で影響を与え、その基底となる思想・理念を提唱した人物です。私たち日本の生協運動に関わるすべての人びとが学ぶべき「創設者の伝統」(ICA 声明)として、賀川思想と行動について振り返ってみましょう。

2. 賀川の原点ースラムでの救貧活動

賀川豊彦は、わが国の生協運動に大きな影響を与えただけではありません。彼は、社会運動家であるとともに社会事業家、ベストセラー作家、さらには生涯キリスト教の牧師と

して日本中そして世界中を伝道して回りました。その活動のスタートは、1909年、21歳に遡ります。当時の神戸は、貿易港、そして造船所などが集積した大工業都市として、わが国の急速な近代化の象徴的な場所でした。しかし、近代化はその“光”とともに“闇”も拡大させます。賀川が目にしたのは日本でも最大級のスラム街（貧民窟）でした。産業発展は、大量の労働力を必要としますが、全国各地から集まってきた人びとのなかには、いろんな事情で働けなくなり、行くあてもなくそのまま貧しいその日暮らしを強いられる者もありました。そして、社会の眼は、目の前に広がるスラムを存在しないかのように近代化へと邁進していました。

牧師を目指す神学生であった賀川は、スラムでの伝道を通し、宗教による魂の救済だけでは限界があると悟ります。心が平穏であることも大切ですが、明日の暮らしへの経済的不安を抱えた者には、祈り以外の解決策も同時に必要とされます。単身でスラム街に住み始めた賀川は次々に支援者や同労者を見出し、この地の困り事に応えようとしました。その結果、彼の救済事業は無料宿泊所や廉価で栄養食を提供する食堂、生活資金の無償融資、診療所や職業紹介所など、生活支援に関わる総合的な事業体となりました。賀川は3年弱のアメリカ留学をはさみ、10年間この地で生活することになります。

私たちは、生協や協同組合は相互扶助の組織であり、組合員同士の助け合い組織だと理解しています。しかし、同時に、生協の父とも呼ばれる賀川豊彦の仕事が、この若き日の貧民救済事業に起源をもつことを忘れてはなりません。賀川の生協運動の土壌となった問題関心は「眼の前の困っている人」にいかにして寄り添い支えるのかというものでした。

戦後の日本は「明日は今日よりも豊かになれる」時代を経て、1億総中流と言われた時代もありました。賀川が忘れ去られたのはまさにこの時期ですが、その時代にあっても人知れず苦しみにあえいでいた人はいたし、賀川豊彦ならそれを見逃しはしなかったでしょう。

この10年、賀川から学ぼうという動きが再び高まっています。格差や貧困といった社会課題を特徴とする「分断社会」に生きる私たちに賀川が多くを教えてくれるという希望があるからです。今日、対等で水平的な助け合い、相互扶助の力は大きく削がれています。同じ地域に暮らす人びとでさえ、その背景や抱える課題がバラバラに分断された時代においては、「水平的・対称的な助け合い」には限界があるのです。国際NGOであるOxfamは毎年、世界の富についての報告書を出していますが、年々格差が広がり、数千人の富裕層が世界の富の大部分を所有するような事態が生まれています。今は職があり、なんとか生活できる状態でも、いつどうなるのかわからない不安のなかで人びとの自己防衛（自助）の意識が強くなっています。しかし、隣人が苦しみ、誰かの助けを求めているなら真っ先にその支えとなろうという思い、「自助」という壁を崩していく（殻を脱ぎ捨てる）行為

の先にこそ、本当の意味での「共助」があります。

お互いさまは、まず私が先に他者に手を差し伸べるという「開かれた共助」からはじまります。つまり、水平的・対称的と思われがちな助け合い（相互扶助）が機能するためには、「困っている人のために私には何ができるのか」という（内向きではない）他者へと差し伸べられる非対称の贈与・giftが必要です。分断社会の克服が課題となっている令和の時代だからこそ、賀川豊彦が甦り、「開かれた共助」、すなわち「連帯」の精神を生協運動に灯していかなければならないのです。生協もまた既存の組合員同士で内向きにならず、社会に対して何ができるのか、一人ひとりが考えるなかで新しいカタチの生協運動を創っていく。これが私たち令和時代の生協組合員・職員に課せられた課題だと思います。

3. 賀川と社会運動—協同組合運動への道

先にみたように、賀川は3年弱のアメリカ留学をはさんで10年間、神戸のスラムで生活し、貧民の友として活動しました。この賀川の姿は「スラム街の聖者」として世界中から称賛されるほどのものでした。アメリカから帰国した賀川は、救済事業を拡大するとともに、たくさんの貧しい労働者たちが、少数の資本家によって虐げられている状況を他人事とは思えず、労働者の抵抗の手段として当時広がりはじめていた労働組合（友愛会）に参画しました。労働者を組織化することで資本家と対等の立場で発言し、報酬や劣悪な労働環境の改善を交渉・要求する。この労働運動の方法は、ただ労働組合にとどまらず、あらゆる社会運動の在り方にも応用できるものです。実際に、その後の賀川豊彦は、協同組合運動はもちろん、農民運動や普通選挙運動、平和運動、女性運動など、日本に生まれた現在に連なるあらゆる社会運動に先鞭をつけることになります。

賀川は、創設されたばかりの国際労働機関 ILO の「労働者は人格であって商品ではない」という思想を先頭に立って喧伝し、数年で関西労働運動のリーダーとなります。この思想は、賀川が提唱する「人格経済」という思想にも反映されています。2019 年は ILO 創立百周年として色々な催しが行われましたが、そこでキーワードとなった「ディーセント・ワーク」は賀川が当時唱えたこの人格経済、「人間としての暮らしを中心に据えた経済」の模索と重なっています。これも、まさに今の時代だからこそ賀川の実践に学ぼうという動きが盛んな理由のひとつとなっています。

賀川が労働運動を通して獲得した「人びとの組織化」という方法、これが生協設立のきっかけとなります。賀川は、立て続けに大阪で購買組合共益社（1919）、灘購買組合・神戸購買組合（1921）設立の指導・助言にあたります。労働者の組織化は、消費者の組織化と一対になってこそ、その力を最大限に発揮するのだと賀川は考えました。これは、スラム

での経験から学んだものです。神戸のスラム住人には、港湾労働者（沖仲仕）として日雇いで働く者がたくさんいました。それなりの賃金を得ていた彼らが生活困窮に陥る原因は、収入ではなく支出であり、賃金を即日博打で失うような消費面での無計画性が暮らしを破壊していたのです。家計を預かる婦人が栄養価や貯蓄への関心をもち、よき消費者を育てることが消費組合（生協）設立の目的のひとつでした。賀川が考える「生活者としての自立」は、“労働”と“消費”の両面から実現させていくものだったのです。

4. 震災救援の父・賀川豊彦と平和への希求

これまで足早に見てきた賀川豊彦の実践について、既存の賀川入門や賀川伝の多くは「救貧から防貧へ」というフレーズを共通して用いています。これは間違っていないですが、最も大切な要素が見えづらくなっています。

社会からこぼれ落ちてしまわないように組合運動を通して「共助のシステム」を構築すること（＝防貧）も大切ですが、すでにこぼれ落ち生活困窮に直面している人は行政（公助、公的扶助）が支援するものだという“他人事”感が、現在の「共助」理解において支配的ではないでしょうか？そう考えると、「救貧から防貧へ」という“移行”ではなく、「救貧と防貧」が折り重なるものとして共助を捉える視点、分断を克服するための、より積極的な共助こそ、私たちの時代が求めるものはずです。賀川は、「（他者への）愛と協同」を一体として語りますが、賀川が提唱する協同組合運動の基盤にあるのは、先に触れた「開かれた共助」、すなわち、愛を織り交ぜた共助という考え方です。ICA 声明にも、「他者への配慮 caring for others」が価値として主唱されています。そして、賀川がこの考えを明確にしたのは、1923 年に発生した関東大震災の救援・復興事業を通してでした。

発災時神戸にあった賀川は震災の一報を受け、即日船で罹災した横浜・東京へと向かい、現地で得た罹災状況を全国各地に伝え支援金を集めることになります。この時に用いられたフレーズが「罹災者の目となり、耳となり、口となって」です。

賀川は震災の被害が最も大きかった現在の墨田区本所で多くの若いボランティアと救援活動に明け暮れます。この地に建てたバラックで罹災者とともに一冬を過ごすなかで、賀川は罹災して苦しみを抱えた地域の人たちがお互いに助け合う姿をしばしば眼にし、自らのこれまでの活動方針を転換します（『地球を墳墓として』,1924）。賀川はここで、社会運動の担い手は自立した力のある者に限定され、生活困窮者は“一方的に助けられる存在”でしかないのだという“弱者”観に自らが陥っていたことを反省しています。東京に活動の場を移してからの賀川は、罹災者たちの行動を範としながら、持てる者が貧しい者を救ける「個の救済」ではなく、「地域の人びとの協同」を通して自分たち自身の力で社会事

業を進める、つまり「救われる者が自ら救う力をもつ」ための共助の組織化を唱えはじめます。本所地区では「弱い存在だからこそ、お互いを支え合う」協同組合方式による地域復興が志向され、消費組合（生協）や信用組合、医療利用組合、学生消費組合、保育園から社会人教育までの各種学校、大工や家具生産者、人力車夫の生産組合（協同労働）など、考えつく限りの協同組合事業が生まれました。

東日本大震災ではCFW（キャッシュ・フォー・ワーク）という、罹災者自らが地域の復旧・復興のために働き地域の絆と個人の尊厳を取り戻すスキームが注目されたのをご記憶の方もいると思いますが、賀川が提唱したのは、この「困り事を抱える当事者自らがお互いを支援し自らもエンパワーしていく共助の仕組み」だったのです。

賀川は関東大震災以降も、奥丹後地震や三陸沖大津波、東北冷害、鳥取大地震など日本全土で発生したあらゆる被災地の現場に真っ先に駆けつけました。賀川は生協運動の父、そして（医療組合や大学生協、農協共済に端を発した共済事業など多方面における活躍から）協同組合の父とも呼ばれていますが、間違いなく「災害救援の父」でもありました。そして、紙面の都合で詳しくは議論できませんでしたが、賀川は生涯を通して平和の推進に尽力しつづけました。戦争のような不幸が生まれるのは、人間の命を軽んじる過度な競争経済の結果であると考え、諸外国との貿易なども含め、公正な「協同の経済」を広げることで平和を実現しようとししました。生協のスローガン「平和とよりよき生活」もこの精神から生まれたものです。

最後となりますが、賀川豊彦は、協同組合運動のリーダーに求める資質として「奉仕的・犠牲的精神」を挙げています（『新協同組合要論』,1947）。ギブアンドテイクや Win-Win の相互扶助ではなく、助けを求める他者の声に真っ先に反応する（見返りを求めない）無償の行為の連鎖の先に生まれるのが賀川の語る開かれた共助社会であり、真の協同組合運動なのです。「ペイ・フォワード pay forward」という言葉があります。目の前の誰かに向けられた行為は、自らに返ってくるのではなく、その行為によって救われた彼／彼女がまた他の者の支えとなる行為へとつなげていくことで報われる。はじめの議論に戻りますが、そういう社会の在り方を目指した賀川豊彦の思想こそ、分断社会と言われる今日において連帯を基盤とした新しい社会を建設するために思い出されるべきものですし、これからの生協運動の指針となるのではないのでしょうか。

【参考文献】

賀川豊彦 [1962-64] 『賀川豊彦全集』キリスト新聞社。
賀川豊彦 [1946 → 2012] 『復刻版：協同組合の理論と実際』日本生活協同組合連合会。
隅谷三喜男 [1966 → 2011] 『賀川豊彦』岩波現代文庫。